学生が「自ら」考える授業

大野　久

1．学生が「自ら」考える授業を目指して

私は，現在，学校・社会教育講座の教職課程に籍を置き，教育心理学，教育実践の研究などの授業を担当しながら，全カリ科目の「現代の思想状況3」という講義を担当している。専門は，青年期を中心とした発達心理学，人格心理学で，特にアイデンティティ理論から，青年期の自我発達や恋愛の問題を研究している。「現代の思想状況3」でも「青年期の自我発達と恋愛」というテーマで，半期の講義をしている。

立教大学に移って2年が経過するが，それまでは，11年間新潟市の女子短期大学の幼児教育科で専任教員をしながら，新潟大学で一般教養の「人格心理学」も担当していた。

今回は，こうした経験の中で考えてきた学生が「自ら」(みずから・おのずから）考える授業について，本学の全カリの講義を中心に書いてみたい。

2．講義の概要

授業の形式は，内容的に工夫はしているものの古典的な講義形式である。教師が一方的に話し，学生はそれを聞きながらノートをとる。半期の間に数回は，アンケートを実施することはあるが，講義中，学生に発言を求めることは皆無である。

これは，個人的にアウトドアが苦手であることと，新潟の時から，100～150名の学生が受講する講義をどのように有意義に展開するかに四苦八苦し，講義という形態を崩すことを考えられないような状況にあったことも原因している。

受講生は，97年度で毎回100名程度が出席している。ちなみに出席はとらない。評価は，学期末のレポートの評価が主たるものである。

3．講義を「おもしろく」するために

講義は「おもしろい」か？こう書くと，学生にウケることだけをねらっている軽薄な授業を目指していると誤解されそうであるが，あくまで学問的に真剣に講義を有意義なものにするための考察であることをはじめにことわっておく。

青年期を中心とする発達心理学の研究者の中で，研究や講義のあり方について討論が交わされたことがある。1990年には日本教育心理学会で「青年心理学はどうあるべきか」というテーマのシンポジウムが開かれた。私も話題提供者として参加したが，そのときに集った30代40代の研究者たちの間で奇しくも意見が一致したことは，講義を考える前提条件として，学生たちが聴こうという気になる講義でないと意味がないということであった。そして，形こそ違え，それぞれが様々の工夫を講義の中で行っているということであった。

その中で非常勤だけで生活していた頃は，学生が講義を聴かない場合，「講義の仕方や内容が悪いのだろう」と考え，専任なると「講義を聴かない学生が悪い」と責任転嫁する，原因帰属する傾向の自己批判などを話し合った。

また，日本発達心理学会のニューズレターで1996年に「研究のおもしろさ」という特集が組まれ，多くの研究者が自分の研究領域についての「おもしろさ」についての考えを語った。私も研究のおもしろさは「知的好奇心の興奮」という常識的な主旨の寄稿をしたが，純粋に研究がおもしろくてたまらないというごく少数の研究者と，「おもしろさ」について考え込んでしまった多くの研究者がいたことを紹介しておこう。

研究者が研究のおもしろさや，講義のおもしろさについて真剣に議論していることを，他の領域の研究者は奇異に思えるかもしれない。しかし，心理学は人間が対象であり，さらに青年心理学は，そこにいる学生，院生が研究の対象であり，研究主体でもあり得るという特殊性がある。「青年期の心理は～」と説明した瞬間に，当の青年たちから「違う」と否定されたり，「自分の生き方や悩みの解決に役立つかと思って選択したのに，こんな講義は聴きたくない」と言われる可能性をはらんだスリル満点の学問領域なのである。それゆえ，こうした問題は研究者にとって切実である。

このような経験の中で考えてきたこと，実践してきたことを以下に書いてみよう。

1)全カリ科目の一期一会

当然ながら，全カリ科目は全学に開かれ，すべての学部の学生が集まってくる。このことから，受講生には，心理学についての基礎知識は全くないことを前提としなければならない。ちなみに高校教育までにほとんど心理学という科目はなく，この点に関しても，高校で基礎を学習する他の学問領域とは違う特殊性がある。

また，おそらく受講生の多くは，今後2度と心理学の講義に参加しないことも予想しなければならない。つまり，これが最初で最後，一期一会である。

ここで，教授する側に2つの選択がある。相手が素人ゆえに，基礎を教え

るべきか，最新情報を教えるべきかである。

これまで多くの一般教育では，基礎からを教えた。私自身そういう講義を学部（ちなみに本学ではない）から受けてきた。しかし，学生としての感想は「つまらない」ものであった。正確に言うと，「知的興奮を覚えない」，「自分や周りの人の心理の理解には役立たない」ものが多かった。

こうした経験をふまえて，講義では，現在のもっとも新しい研究成果を紹介することにした。また，心理学の内容は正直8割はつまらないものであるが，残りの2割のおもしろい部分を紹介することにつとめた。

将来，その学生が心理学を専攻し，そのための訓練ならば，つらくとも基礎から始めなくてはならないが，全カリの一期一会の学生には，内容を最新のエッセンスに絞ることが私は個人的によいと思う。

2)講義の内容

97年度の「現代の思想状況3」では，副題を「青年期の自我発達と恋愛」とした。本来の「思想状況」という表題からは，哲学的，思想的内容が推測されるが，青年たちが自分たちの自我発達や恋愛に関して考えていることも現代の思想状況に違いはないという勝手な理由で，講義内容はもっぱら青年を取り巻く事象についての心理学的考察である。

具体的に内容は，自我発達に関しては，アイデンティティの定義と機能，アイデンティティのヴァリエーション，危機の意味（青年期の迷いと選択の意味），アイデンティティ・ステイタスなど，恋愛に関しては，魅力の考察，恋と愛の違い，恋の特徴（条件性，結晶作用），愛の特徴（無条件性，相互性，人間関係の有無），愛のヴァリエーション（母性愛，異性愛，夫婦愛，社会的活動における愛，宗教的愛），親密性，親密性の発達の男女差，生殖性（愛と性行動）などである。

これまで，一般教養の人格心理学を担当してきて，比較的学生に評判のよかった内容としては，古い研究ではあるが人格の類型論（これは人間理解に有効である），精神分析理論（自分の知らない心（感情）の世界をかいま見ることができ，自己理解，他者理解に非常に有益である）などあるが，青年たちが一番興味を持っていたテーマは，一貫して青年期の進学，就職，跡取り問題などの進路選択，結婚などの人生の選択に関する青年期の悩みの問題と，恋愛問題であった。

そこでこうした問題を正面から取り上げることにした。特に恋愛の問題は，青年たちの関心の高さに対して，高校までの教育には全くふれられない問題であること，むしろ故意に大人が青年たちにメッセージを送ることを避けているようにさえ思われる部分なので，一つの挑戦的試みといってよいかもしれない。

3)講義のわかりやすさ

次に，その絞ったエッセンスを学問的に素人の学生にわかるように伝えなければならない。この作業は，相当に大変なことである。

ちなみに，私はすでに紹介したように，11年間ごく平均的な女子短期大学で講義していたが，この経験は，わかりやすく話す技術の向上に非常に役に立った。学生は興味ある内容には耳を傾けるが，興味のないことや，具体性のない内容は，全く関心を示さない。また，教員に気を使って聴くふりをすることすらない。つまり，反応が実にストレートであり，講義に対する直接的な試金石であった。

わかりやすさについての中心的な問題は，講義にいかに具体性を持たせるかという問題である。

青年心理学の方法論の中で，進路選択，いじめ，悩みといった日常的，生態的な語を第１種の用語，自己概念，アイデンティティ，親密性などの構造化された構成概念を第２種の用語と呼ぶ区別がある（西平直喜，1997)。そして，この２種類の用語間のギャップをいかに埋めるかが問題になると指摘されている。

確かに，学術論文なら第２種の用語だけで説明すればよいことが，講義で学生に話すためには，どうしても第１種の用語に翻訳する事が不可欠になる。学問的には第１種の用語を第２種の用語に置き換え，どう使いこなすかを訓練されてきた研究者にとって，皮肉にも逆の方向の作業が要請される。また，この作業が想像以上に難しい。

例えば，「青年の恋愛は，その大部分が，自分の拡散した自我像を他人に投射することにより，それが反射され，徐々に明確化されるのを見て，自己の同一性を定義づけようとする努力である」(Erikson, E.H., 1950）という第２種の用語で説明された内容を，「なぜ高校生的恋愛のデートでの１番の関心が『僕のこと好きかい？』，『こんな私のどこがいいの』ということになるかというと，青年期には，自分に自信がないから，相手から『好き』といってもらうことで，自分に対する自信の糧（支え）にしているんだね。だから自分では自分に自信がもてないが，少なくともこの人が『あなたのことがすき』といってくれるのだから，きっといいのだろうと考える。言い換えると，この場合の恋愛の主な関心は相手でなく相手に写った自分自身ということになる。」と第１種の用語に翻訳し直さないことには，学生には通じない。女子短期大学での講義のために行ってきたことは，一貫してこの努力をしてきたと言ってよい。

本学の学生の中には，説明があまりに日常レベルなので，「講義の学問的レベルが低い」と言いたげな顔をするものもいるが，その場合には，「難しい内容を難しい言葉で講義することは簡単だが，やさしい言葉でわかりやすく講義することの方がはるかにむずか

しい」ということを暗に説明することにしている。

4)教授者のポリシーを伝えること

青年心理学の中でさえ，心理学の方法について，現代の青年の実状をありのまま把握し，研究者の価値観を青年に伝えることは，客観的科学としてふさわしくないという考え方と，より教育的に考えて，発達の必然性や発達的に望ましい方向性を青年たちに示し，主体性を発揮する契機を与え，自覚をうながす教育的配慮をするべきであるという考え方がある。

この点に関して私は後者の立場に立っている。個人的な感情からも，100人以上の学生を前にして，恋愛における人間関係，性に関する問題，自我発達における決断，親子関係などについて客観的事実だけを冷静に話していることに終わるわけにはいかない。こうした問題に関して，「私」の立場から，学問的知識と個人的経験と学生から提供された資料と想像力とをフルに動員して，どうすることが人として幸せなのかを語るようにしている。もちろん「これは個人的意見で正しいという保証はない。ただ，学生諸君がこれを契機に自分自身で考えてほしい」ことを伝える。また，考えられるだけ多様な立場を考慮するようにしている。

5)学生が「自ら」考えること

このように，学生の興味ある内容について，わかりやすく講義し，かつ，教員の考え方を示し，その上で学生に考えてもらう。

この最後の部分も難しい問題をはらんでいる。「そんなことは自分と関係ない」(防衛機制として真剣に考えないようにしている場合もある）とか，「そんなことはわかっている」と，考えることを拒否してしまう傾向が人間にはある。

しかし，頭で理性的にわかっていると思っても，感情レベルから（心の底から）わかっているということとは違う。例えば，差別はよくないとわかっていても，差別に直面した時，実際にどう感じ，どう行動できるかは別である。

したがって，いかに学生に自分の問題として，具体的に自分の生き方に引きつけて考えてもらうかがポイントになる。このために講義の中で多くの「問い」を用いるようにしている。例えば，「あなたは精神的に大人か」，「異性のなにに魅力を感じるのか」，「かつての恋愛の中で自己中心的に行動したことはないか」，「性行動を考えるとき，相手の幸せを本気で考えているか」などなどである。もちろんこれは道徳教育ではない。心理学者として，人間の弱さも十分に知った上での問いである。理想を押しつけているのではなく，学生たちに自分の生き方に責任を持ち，主体的に考える契機にしてほしいという願いからである。その結果，自分を許すことも含めて（心理学を学んで初めて過去の自分や恋愛の相手を許すことができたという報告もある)，

人間の悲しさを自覚することになったとしてもそれは無駄ではないように思う。

6)学生との対話：レポート

こうした講義の最後に学生にレポートを提出してもらう。テーマは自分の自我発達や恋愛に関する自己分析である。講義の中で心当たりのあるテーマについてエピソード形式で報告し，それを講義の中で解説された第2種の用語でまとめ直す作業である。条件は可能な限り，自分の実体験であること。研究者側の義務として，守秘義務を厳守し，レポートの内容を研究以外では使用しないこと，公表する場合も固有名詞はすべて伏せ，引用もレポートの部分だけを用い，誰のレポートかは特定できない配慮を十分に行うことを説明している。これは教員学生間の信頼関係に基づいている。また，評価は，その青年の経験そのものを評価できるわけもなく，内容ではなく，分析力，表現力がその対象であることを十分に伝える。

こうして新潟時代から数年間にわたって提出されたレポートは，学生の実生活に根ざしたものであり，また，優れた分析力を発揮しているものも少なくない。

数年前，青年期の恋愛についての研究を発表したが（大野，1995），これはそのすべてが学生の協力してくれたレポートのおかげである。

こうしたレポートの中で，自分の経験した非常につらい体験について報告し，その内容をあえて「後輩のために講義で使ってください」と添え書きのあるものもある。

また，レポートの中で報告された実例を講義の中で可能な形で引用することで，次年度の学生から，「私の経験したことと台詞まで同じで驚いた」，「こうした経験が自分一人の問題ではないことを知って安心した」，「今まで憎んでいたかつて別れた相手の気持ちがわかり，やっと許すことができた」などの感想につながる。こうした意味でも学生にとっても有意義な資料になっていると思う。

以上，講義について考えてきたこと，実践してきたことを報告してきたが，私の本学での全カリの講義は始まったばかり，学生からの評価はこれから下される。

（おおの　ひさし　本学文学部学校・社会教育講座教授）

引用文献

Erikson, E.H., 1950 Childhood and society. New York : W.W.Norton.
（仁科弥生訳　1977/1980　幼児期と社会（1．2）．みすず書房）
西平直喜　1997　青年心理学における〈問い〉の構造　青年心理学研究　第9号　31-39.
大野　久　1995　青年期の自己意識と生き方　落合良行ほか編　講座生涯発達心理学　第4巻「自己への問い直し：青年期」金子書房 Pp89-123.